

実際の会話場面における「から」と「ので」の使い分けに関する研究

李, 曦曦
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4493115>

出版情報：比較社会文化研究. 26, pp.65-73, 2009-08-31. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

実際の会話場面における 「から」と「ので」の使い分けに関する研究

リ 李 ギ 曦 ギ 曦

1. はじめに

外国人の日本語学習者にとって、「から」と「ので」の違いは従来、大きな難点の一つだと思われている。二つの語とも原因や理由を表すため、常に混乱しがちである。しかしながら、どちらを使っても、理解の妨げにはならないので、大部分の学習者はあまり気にしていないのが実状である。ところが、日本語上級者が自然な日本語を話すためには、正確に「から」と「ので」を使い分ける必要があると考えられる。つまり、自然な日本語を話すためには「から」と「ので」が大きな役割を果たしていると言えるだろう。しかしながら、大学時代のテキストを読みかえすと、「から」と「ので」に関する記述は非常に簡単で、ただ「理由や原因を表す助詞」と書いてあるだけである。より高度な日本語を身に付けたい学習者にとって、「から」と「ので」を使い分けることの重要性は言うまでもなく、そのためには、このような簡単な説明だけでは不十分である。

本研究は、日本語話者の実際の会話内容を分析することによって、「から」と「ので」の使い分けを明らかにすると同時に、それぞれの、談話中での働きを究明するものである。

2. 先行研究の概観

「から」と「ので」の違いについては、今日まで様々な研究がなされてきた。本章では、これらの先行研究を紹介する。「文レベルの『から』と『ので』の意味的用法」と「談話レベルの『から』と『ので』の機能」といった二つの種類を分けて、それぞれに関する先行研究を述べることにする。

2.1 文レベルの「から」と「ので」の意味的用法に関する研究

永野賢 (1952) 『『から』と『ので』とはどう違うか』

従来の諸説が簡潔にまとめてあるが、「から」と「ので」の用法の特性を分析することによって、両者の意味の特質を七点にまとめて説明している。その七点を簡単に説明すると、①未来や命令の意味を含む文が次にくる時には、

「から」は使うが「ので」は使わない、②「から」は結果や帰結を先に述べて、原因・根拠・理由などをあとから説明的に述べることができる、③「から」は「ので」の持っていない終助詞的な用法がある、④「から」には、「は」「こそ」「とて」などの係助詞や、「といて」などをつけて、特に提示する用法がある、⑤「ので」のあとにくる文は、事柄の客観的叙述であること、⑥「ので」は、推量や未来の意味の言葉につくことができない、⑦「から」のほうは「のだ」「のです」につけて用いることができる、ということである。この中でも、一番大きな違いは、「から」は後件に対する理由や根拠を主観的に説明するものであり、それについては話し手の主観が充分の責任をもつ、という意味合いのものようである。これに対して、「ので」は事柄のうちにすでに因果関係にたつ前件、後件が含まれていて、それをありのままに客観的に描写する場合に使われ、「ので」で結びつけられるものについては、主観的な責任がない、という意味合いのものであるとされている。

角田三枝 (2004) 『日本の節・文の接続とモダリティ』

筆者は①現象描写②判断③働きかけ④判断の根拠⑤発話行為の前提という五つのレベルに分けている。このような思考プロセスの違いという観点を組み込むことによって、「ため」、「ので」、「から」を比較した。その結果としては、「から」は全ての用法に用いることができるが、「ので」には制限がある。それは、主節が丁寧体の場合には呼応しやすいのに対して、主節が普通体の場合には呼応しにくい。つまり、丁寧な文の場合に限られるとしている。

上林洋二 (1992) 『理由を表す接続詞補稿 —— 『から』と『ので』 ——』

筆者は永野の観点を踏まえた上、次の意見を出した。「から」は二義性 (①原因から結果を導く —— 因果関係・②推論を導く —— 含意関係あるいは予測可能性) を有するが、「ので」は①原因から結果を導くという意味しか持たない。しかしながら、これを基本的に認めながら、②の「ので」は派生的な用法と見ることができるともかもしれないという結論に達している。

2.2 談話レベルの「から」と「ので」の機能に関する研究 伊藤勲 (2005) 「条件法研究——いわゆる接続助詞をめぐって」

文学作品中の地の文と会話文の「から」と「ので」の用例を分析し、「から」には主観的表現が多いとは言えるにしても、客観的表現もかなりあり、「ので」には、客観的表現が圧倒的に多いが主観的表現も少しは存在している、という分析結果に至っている。こうしたわけで、「から」と「ので」の用法は明らかに違っており、その表現分野の、カバーする範囲は大きく異なるものの、完全に用法が分かれてしまっているとはいえ、一部分は重なりあっていると結論付けられている。

杉秀美 (2001) 『「から」と「ので」に表現される理由づけの強調の度合い』

筆者は、看板、広告記事などをデータとし、「から」と「ので」を含む個々の用例を吟味している。調査分析の結果「から」と「ので」に表された実質的な意味の違いは、広く一般的に言われているような丁寧度や主観性の問題などではなく、理由の強調度の違いであるという結論に達している。つまり話者の語の選択基準は丁寧度や主観性に基づいているのではなく、根拠である従属節に表わされた理由をどの程度明確に強調したいかという話し手の意識に基づいているということである。つまり話者が理由を強く打ち出した時は「から」を使い、反対にあまり強く前面に押し出さたくない時は「ので」を使って説明するとされている。

泉子・K・メイナード (2004) 「接続表現『だから』: 論理的な意味の向こう」 『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究—』

筆者は談話のストラテジーとして、人間の結びつきに動機付けられる「だから」を中心に考察した。人間関係を実現し、発話行為のストラテジーとして用いられる「だから」も、〈原因—結果〉関係を示す本来の「だから」の意味と無関係なわけではない。両者の「だから」は根本的に繋がっているわけで、その繋がりを認めながら「だから」が情意表現として、また発話行為の交渉に関係して機能し、さらに、人間関係の操作にも用いられることを探っていくことにした。

谷部弘子 (1997) 「第6章『のっけちゃうからね』から『申しておりますので』まで」 『女性のことば・職場編』

筆者は文体の丁寧さとのかわりという観点から、接続詞「から」と「ので」の自然談話における使用の実態を見、両形式が現れる場面と言語環境について分析・考察した。分析方法は、女性協力者19名の談話を選び、同一話者が職

場内の「あらたまった場面」と「くつろいだ場面」という二つの異なる場面で、いわゆる原因・理由をあらわす「から」と「ので」をどのように使い分けているのか、を調査した。その結果、話し言葉においては、「場面や発話相手によって、現れ方に一定の傾向が見られるということ」、具体的には以下の二点が明らかになった。

- ① 職場外の相手との、かなりあらたまった場面では、「ので」が多用され、非常にくつろいだ場面では「から」が多用される。
- ② 「ので」は、全般に丁寧な文脈の中で選択されており、場面、相手、接続形式とも「から」に比べて狭い範囲で使用されている。

谷部弘子 (2002) 「第9章『から』と『ので』の使用にみる職場の男性の言語行動」 『男性のことば・職場編』

男性協力者20名と女性協力者19名の談話を使い、「から」と「ので」の出現状況について、場面、接続形式、年代の三つの観点から考察した。結果をまとめると、以下のような傾向が見られた。

- ① 「ので」は「あらたまった場面」に大きくかたよって現れ、「から」は場面によるかたよりは見られなかった。この点に関し、男女の差は見られなかったが、「ので」の出現率は男性のほうが高い。
- ② 「ので」の約半数は、丁寧体と結びついた形で現れている。この丁寧体に接続する「ので」の使用は女性のほうが多い。
- ③ 「ので」は男女とも50代協力者の使用がきわめて少なく、逆に20代、30代、とくに男性の出現率が高かった。

Schiffrin (1987). "So and Because: Markers of cause and result" *Discourse markers*

Schiffrin は「構造的な関係」と「意味論的な関係」といった二つの段階に *because* と *so* の分析を行った。まず、「構造的な関係」の段階では、「*because* は従位接続詞であり、*so* は等位接続詞であるため、二つの言葉は談話の中で、*because* は従属節を導き、一方 *so* は独立文を導く。」という結論に達している。次に、意味論的な意味を分析する際に、「*because* は原因 (cause) を表し、*so* は結果 (result) を表す。」と述べ、更に、談話の中で、三つのレベルの意味を表しているとされている。それは、概念 (ideational structure)、知識 (information state) と行為 (actions) である。

2.3 先行研究の問題点

- ① 今まで多くの研究は「から」と「ので」の使い分けを、文法意味などのさまざまな観点から分析を行うが、実際の会話から両者を分析する研究、すなわち、「から」

と「ので」の会話機能を分析する研究はまだ少ない。

- ② 「から」の福岡方言は「け」、「けん」などがある。これらの方言は実際の会話の中での使い分けはまだ言及されていない。この問題は本研究で解明したい。

D	男	22	筑豊	学生
E	女	25	不明	コンビニのスーパーバイザー
F	男	40代	福岡	コンビニのオーナー
G	男	30代	福岡	コンビニの店長

会話データは、次のような三つの場面に分かれている。

- (一) 女子大学生同士 (AとB) の雑談 (約40分。場所：教室)
- (二) 男子大学生同士 (CとD) の雑談 (約20分。場所：ファミリーレストラン)
- (三) コンビニエンスストアの会議での会話 (EとF) (約20分。場所：コンビニエンスストアのバックルーム)

3. 分析

本研究では、実際に収集した自分の周りの日常会話を分析してみる。目的としては、実際に自ら取ったデータを分析することによって、会話場面、会話参加者についてより正確な判断をすることができると考えたためである。

3.1 研究対象と研究方法

今回協力してくれた日本人は全員で七人で、対象者の性別、年齢、出身地、職業は以下のものである。

表1. 対象者のデータ

協力者	性別	年齢	出身地	職業
A	女	20	筑豊	学生
B	女	20	筑豊	学生
C	男	21	長崎	学生

3.2 研究結果

この三つの会話の中で、「から」と「ので」が出てきただけではなく、「から」と同じ意味の方言もたくさん出た。たとえば、「けん」(福岡方言)、「け」(筑豊方言)、「き」(筑豊方言)である。六人の登場人物による、この五つの言葉のそれぞれの出現数と出現率は以下の表のようにまとめられる。

表2. 対象者の五つの言葉の出現数と出現率

発話者		A	B	C	D	E	F	計
発話数		133	86	36	35	30	26	346
から	出現数	0	0	0	0	1	3	4
	出現率	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	3.33%	11.54%	1.16%
ので	出現数	3	2	5	1	10	0	21
	出現率	2.26%	2.33%	13.89%	2.86%	33.33%	0.00%	6.07%
けん	出現数	9	1	5	4	0	0	19
	出現率	6.77%	1.16%	13.89%	11.43%	0.00%	0.00%	5.49%
け	出現数	28	3	0	0	0	0	31
	出現率	21.05%	3.49%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	8.96%
き	出現数	0	1	0	0	0	0	1
	出現率	0.00%	1.16%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.29%

この表を見てみると、「ので」の総出現数は21で、かなり出現し、その一方、「から」の総出現数は4で、極めて少ないが、「から」と大体同じ意味の方言「けん」、「け」、「き」のそれぞれの総出現数は全部合わせて51になり、非常に多い。もちろん、この結果はフォーマル、インフォーマルや、上下関係などのいろいろな要素が絡んでいると考えられる。したがって、これらの会話データを三つの場面に分け

て具体的に分析していくことにする。

3.3 女子大学生同士 (AとB) の雑談

まず、この会話の登場人物AとBを紹介する。AとBは同じ大学の女子同級生であり、二人とも筑豊出身である。この会話の中で、Aはいつも、話題を出し、全体を導く役をしている。それに対し、Bは自分から話すより、むしろ、

Aの話に相づちを打つ役をしているのではないかと考えられる。

表14から分かるように、この会話の中で、二人は「から」を一度も使っていないが、その代わりに、「けん」、「け」、「き」を数多く使っていることは明らかである。Aの場合は、「けん」の出現数は9で、「け」の出現数は28であり、「け」が圧倒的に多いという結果が出た。その一方、Bの場合は、「けん」の出現数は1で、「け」の出現数は3で、「き」の出現数は1である。Aと同じように、「け」が一番多く使われていることが分かった。これらの「けん」、「け」、「き」といった方言の言葉は「から」とほぼ同じ働きをしていて、あまり違いが見られないと考えられるだろう。しかしながら、ある興味深い点が観察された。まず、ここで、Aの発話の中で、「けん」が現れる会話部分を挙げてみたい。

- ① うん。もう電話しかせんけん。
- ② 昨日学校に行っ、卓球場ついでに行ったら、「あ、先輩、バーベキューあるんですよ」みたいな言われたけんね、「は？行く！」って言って。
- ③ 納豆の日になったら、電話掛かってきて、「***さん、もう納豆予約しようけんね、取りに来て」って言われてからね。
- ④ トイレ見たら、めちゃくちゃ汚かったけんね、床とかもめっちゃ雑巾とかで拭いたらしいんね、あ、頑張ったって思って。
- ⑤ 朝6時くらいに入っとったけんね。
- ⑥ だけ、振込みやったら、勝手に振り込んでもらえるけど、手渡しやけん、
- ⑦ あれ、壊れたけんね。
- ⑧ なんか、夏休みの暑いあの卓球場に、いきなりさ、入れてしまったけんね、片方は風引いて、てかバテてからね。
- ⑨ やっぱここ夏になったら、40超えるけんねって言いよったら、ひいとった。うそでしょ、みたいな。

この九つの発話文の中で、①と⑥を除き、残りの七つの「けん」の後ろは全部、「ね」が付いている。すなわち、「けんね」という組み合わせがかなり多く見られている。一方、「けね」という組み合わせを見てみると、Aの発話の中で、28個の「け」が出て、その中で、「けね」は1個しか出なかった。この「け」と「けん」の割合を表に出してみると、以下のようなになる。

表3. 対象者Aの「け」と「けん」

発話者A	け	けん
「ね」と組み合わせの数	1	7
出現数	28	9
「ね」と組み合わせ率	3.57%	77.78%

表から分かるように、「けんね」という組み合わせは「けね」より圧倒的に多い。ここでは、まず、「ね」の機能を見てみたい。広辞苑によれば、「助詞『ね』は、語句の切れ目に付いて、相手に念を押し、または軽い感動を表す。」とされている。また、泉子(1992)によると、日本語のデータ60分中、文末に現れる助詞は、「ね」が130個所で一番多かった。以上のことから、「ね」は文を終えることに大きな役目を果たしていることが分かった。この「ね」の機能との関係から考えてみると、「け」が「ね」に付きにくいことは、「け」は後ろに文を接続しやすいからではないかと考えられる一方、「けん」には「ね」が付きやすいのは、「けん」自体が文を終えやすいためであろう。

また、「けね」という組み合わせは発音しにくいということも原因の一つにあるだろう。

「けん」、「け」、「き」といった方言同士は非常に似ているのは確かであるが、今回分析した結果は一つの小さな違いになるのではないかと考えられる。

次は、「ので」について分析してみたい。

AとBは上下関係もなく、年齢差もなく親しい友達なので、お互い遠慮して話す必要がないと考えられ、更に、インフォーマルな雑談であるため、砕けた話し方が一番普通だろう。そこで、二人の「ので」の出現数を見てみると、Aは3で、Bは2である。さて、どういった場合に「ので」が使われているのか。以下は二人が「ので」を使っている発話文である。

Aの場合：

- ⑩ 先輩相談して、「最近、精神的にきついんで」とか言いよって、めっちゃ泣いてしまったんね。
- ⑪ 今度電話して「やっぱりもう、精神科行ったら、結構アレらしいんで、しばらく一人暮らしもやめにして、こっちにおることになったので」っち。

Bの場合：

- ⑫ 「自宅から通おうと思うので、バイト行けません」って言えばいいやん？
- ⑬ 「自習とかもあるんで、入れません」みたいな言っ

たら、ずっとそんなんやん。

これらの発話文を見てみると、共通点は明らかであると考えられる。それは、これらの「ので」文は全部引用文であることである。つまり、Aは直接にBに「ので」を使うのではなく、Bも直接にAに「ので」を使って会話するのではないのである。コンテキストを通して、具体的に分析したら、A⑩は先輩に、A⑪はオーナーか奥さんに「ので」を使っていて、B⑫はオーナーか、奥さんに、B⑬は店長に「ので」を使っているのである。すなわち、目上の人達に「ので」を使っているわけである。これは、「『ので』は『から』よりやわらかい表現であるため、地位が下の人は地位が上の人に対し、かなり「ので」を使っている」という観点に当てはまる。

更に、これらの「ので」文の接続状況を見てみると、Aの場合は「ので」で終わりであるが、Bの場合は後続文が「行けません」、「入れません」といったような丁寧文であることが分かった。

3.4 男子大学生同士（CとD）の雑談

この会話の登場人物CとDは同じ大学であるが、CはDの学校とバイト両方の後輩である。Cの出身地は長崎であり、Dの出身地は筑豊である。これは、二人がファミリーレストランでご飯を食べながら、取ってもらった会話なので、沈黙時間がより多く、長い話はあまりなく、短い話がたくさんあった。表11から分かるように、CとDは「けん」と「ので」だけを使っていた。長崎の方言の中には、「け」と「き」がないため、Cはあまり使わないと考えられる。更に、Dも無意識に使わなくなったのではないだろうか。

出現数の対照を見てみると、Cの場合は、「けん」が5で、「ので」も5であるのに対し、Dの場合は、「けん」の出現数は4で、「ので」の出現数は1である。ここで、一つの典型的な例を挙げてみたい。

<会話例1>

C：そうすると、おれらの負担が大きくなってく
 じゃないですか。
 D：言ってみればいい。「おれお金ないけん、出して
 くれん？」って。
 C：ハハハ。後輩に？
 D：そう。土下座すれば？「お金ないので、出して
 くれますか？」って。

この発話はDがCに対して、冗談を言っている文である。

太字のところを注目してほしい。まず、接続形式から分析すると、「けん」の後続句は「出してくれん」という常体(非デス・マス)で、「ので」の後続句は「出してくれませんか」という敬体(デス・マス)である。これは、「けん」(「から」と「ので」の特徴が一番現れる例文だと言えるだろう。次は、内容から分析していくと、「おれお金ないけん、出してくれん？」という発話はただ普通に後輩に言う話であるため、尊敬する必要もなく、話を和らげる必要もあまりないので、Dは「けん」を選んでいるわけである。しかし、その次、Dは、「土下座すれば？」と言った。「土下座」というのは、相手に恭順の意を表すため、それに呼応して、「ので」を選んでいるのである。

この例文は、Dの唯一の「ので」文であるが、話者AとBと同じように、引用文の形式で現れている。つまり、先輩であるDは直接にCに「ので」を使っているのではないのである。

次は、Cの発話を分析してみたい。雑談というインフォーマルな場面であるため、Cは砕けた話し方で、「けん」を5回ほど使っていたのであるが、後輩であるため、Dに敬意を表す必要もあるので、「けん」と同じ程度で、「ので」を使っていた。ここで、Cの「ので」文を挙げてみたい。

- ⑭ 今回はおれ誘われてる立場な**んで**、やってくれる**んで**。
 ⑮ この間はおれが誘った**んで**。
 ⑯ パソコンは絶対壊れてる**んで**、直しに行かないといけないんですよ。
 ⑰ 今日パスタ使う**んで**、6、7、8、9が。。。。。

これらの例文を見てみると、全部「んで」といった形式で現れている。かなり口語的であるが、先輩Dに対する敬意は明らかである。接続状況については、「んで」(「ので」)で終わるのはほとんどであるが、残りの一つは後続句が「デス・マス」文である。

3.5 コンビニエンスストアの会議での会話（EとF）

この会話は会議といったフォーマルな場面の会話である。登場人物は三人である。Eは20代の女性で、スーパーバイザーである。Fは40代の男性で、オーナーである。Gは30代の男性で、店長である。Gの発話はあまりにも少なく、関連言葉も入ってないため、研究の対象外とした。

表14から分かるように、フォーマルな場面なので、EとF二人とも、方言は一切出てなかった。更に、Fは地位が一番上であるし、他の原因もあるかもしれないが、「ので」も使っていなかった。「から」だけは三つ現れていた。それ

に対し、Eの場合は、「から」の出現数は1で、「ので」の出現数は10である。

まず、Fの「から」文を挙げてみたい。

- ⑱ 二便で入れて、三便でどうしても、その、昼間、枝豆食わないから。
- ⑲ こんな、細長いケーキとか、そこに、またいろんなのがあるから、もし、もし、そのチーズケーキを金土日で、もう少し増やすのであれば、棚一段するだけでね。
- ⑳ だから、もう、ベーカリ全体をどーんと減らすから、どうしても、週末セールが十分とれない。

これらの例文を分析してみると、年齢と地位が両方とも上であるオーナーは全部「非デス・マス」体で会話をしていたのである。オーナーにとって、EやGなどに敬意を表す必要がまったくないため、「ので」の使用はあまり見られなかったと言える。「から」の接続状況については、「から」で終わるか、後続句が「非デス・マス」であるか、の2タイプに限られるということである。

次は、Eの発話を分析してみたい。Eは「から」より、「ので」が圧倒的に多く使われている。それは、Eは年齢も下で、地位も下であるからではないかと考えられる。次のような例文に注目してもらいたい。

〈会話例2〉

E：ああ、はい。これです。(店名A)は569件ですね。でも、そのうち、(カード名A)がもう257件で、(カード名B)が312件になってますんで、で、(店名B)もえーと、302件が(カード名B)で、147件が(カード名A)で、どんどん、あとう、(カード名A)が増えてますんで、(店名A)はあとう、だいぶ、言えるじゃないですか。(カード名A)のお客さんに対して(カード名B)を勧められるようなワンステップ上でやっていきたいなあと思います。引き続き。

この発話文の中で、Eはまず、二つの店での二種類のカードの件数報告をした。そして、最後に、「(カード名A)のお客さんに対して(カード名B)を勧められるようなワンステップ上でやっていきたい」という自分の観点を主張した。「んで」「ので」が二回ほど使われた。一回目の「んで」

を見てみると、その先行文は店Aの二種類のカードの件数である一方、後続文は店Bの二種類のカードの件数である。したがって、この「んで」「ので」の会話機能は件数を列挙することによって、並列する働きをしているのではないかと考えられる。二回目の「んで」の分析に入る前に、Schiffrinが談話標識(discourse marker)の分析が行われる時の一つの例文をここで引用しておきたい。以下のようになる。

〈会話例3〉

Sometimes it works. Because there's this guy Louie Gelman, he went to a big specialist. 「ここに経験談が入る」 So doctors are?well they're not God either! (Schiffrin1987:195)

泉子・K・メイナードによると、ここで、「自分の意見・立場(position)を支持(support)するためにその理由を述べることにして because と言っているのである。つまり、この because は文と文の間の原因(理由)と結果を結ぶという論理性に基づいた機能を果たしているのではなく、会話行為の全体的構造に関係していることが分かる。」と述べられている。

Eの二回目の「んで」「ので」の分析に戻ってみると、むしろ、Schiffrinの例文の because と同じような働きをしているのではないだろうか。Eは二種類のカードのデータを出すことによって、自分の意見・立場を支持している。したがって、この「んで」は「お腹が痛いので、学校を休みます。」などというような単なる原因や理由を表す「ので」とは違って、Eの主張「(カード名A)のお客さんに対して(カード名B)を勧められるようなワンステップ上でやっていきたい」という主張の支持を行うための理由を述べる談話標識としての役割をしているのではないかと考えられる。

次の例文はEの唯一の「から」文である。

〈会話例4〉

E：今、金土日安い、安くなってるんですよ。(F：ああ。)それで、あとう、(商品名A)の数字がとてもいいので、取り込んだら売れるかなって。
F：取り込めないんじゃない? <笑>
E：今聞いたらこう並べてあるから。

ここで、Eはめずらしく「から」を使った。それはなぜだろう。内容から分析していくと、Eはまず、「商品Aは他

の店で結構売れているから、うちの店でも取り込んだ方がいい。」ということをしてFに勧めた。それに対し、F(オーナー)の反応は「棚のスペースがないんじゃない?」という疑問を持っていた。そして、Eは「スペースのことは大丈夫。」ということを書いて、更に、自分の進言していることに有利な情報を加えていった。すなわち、ここで、Eは自分の観点を強調したいため、「から」を使ったのである。もし「ので」に置き換えると、強調の意味が薄くなってしまおうと考えられる。

4. おわりに

以上、自ら取ったデータを三つの場面に分けて分析してきた。全体的に見てみると、年上の人と、地位が上の人に、「ので」がよく使われること、自分の意見を強調したい時、「から」が使われること、「ので」の後続句は「デス・マス」が現れやすいことなどが分かった。

ところで、本研究でもっとも興味深いことは方言の出現である。「から」の福岡方言としては、「け」、「けん」、「き」といった三つの言葉がある。第三章で、「から」は友達同士の雑談などに一番使われ、インフォーマル的な特徴があると論じたが、この章で収集したデータから見てみると、場面(一)と場面(二)の雑談の中では、「から」の出現数は0だった。「から」の代わりに、「け」が一番多く現れ、その次に「けん」と「き」が出現していることが分かった。このことから、「け」などの方言は日常会話によく使われ、さらに、親しい仲間内では「け」などの方言を使うことによって、その親しみを伝えることができ、気楽な雰囲気や楽しさを築き上げるという機能を果たしているのではないかと考えられる。また、同じ方言である「け」と「けん」の使い分けについては、「け」は後ろに文を接続しやすい一方、「けん」は文を終えやすいといったような機能も明らかにした。

5. 今後の課題

同じく原因や理由を表す接続詞「だから」について、会話の中で分析してみたい。男女差、上下関係、接続状況などいろいろな段階に分けて分析していきたい。

接続詞「だから」に対応する福岡方言は「だけん」である。「だけん」には「だから」の会話機能があるかどうかについて研究する。また、どの程度「だから」の会話機能に対応しているのかを具体的に考察してみたい。

参考文献

阿部潔(2000)「日常のなかのコミュニケーション」北樹

出版

- 庵功雄(2000)「初級を教える人のための日本語文法ハンドブック」出版社：スリーエーネットワーク
- 伊藤勲(2005)「条件法研究——いわゆる接続助詞をめぐって」近代文芸社
- 岩井良雄(1970-1974)「日本語法史」東京笠間書院出版
- 岩崎卓(1993)「ノデ節、カラ節のテンスについて——従属節事態後続型のルノデ/ルカラ——」『待兼山論叢 日本語学篇』第27号 大阪大学文学部
- 上林洋二(1992)「理由を表す接続詞補稿——『から』と『ので』——」『東海大学紀要 留学生センター』第12号 東海大学出版
- 木山三佳(2004)「学習者言語にみる接続助詞「から」の談話機能の発達」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第14号
- 「広辞苑」岩波書店 (CASIO電子辞書収録分)
- 甲田直美(2001)「因果関係の効果」『談話・テキストの展開のメカニズム——接続表現と談話標識の認知的考察』風間書房刊
- 佐久間まゆみ(1997)「文章・談話のしくみ」おうふう
- Deborah Schiffrin, 1987. *Discourse markers*. Cambridge University Press.
- 小学館(1975)「日本国語大辞典」日本大辞典刊行会編
- 杉秀美(2001)「『から』と『ので』に表現される理由づけの強調の度合い」南 雅彦・アラム佐々木幸子 編『言語学と日本語教育』くろしお出版 pp.302-305
- 砂川有里子(2005)「文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究—」くろしお出版
- 泉子・K・メイナード(1992)「会話分析」くろしお出版
- 泉子・K・メイナード(1997)「談話分析の可能性」くろしお出版
- 泉子・K・メイナード(2004)「接続表現『だから』: 論理的な意味の向こう」『談話言語学—日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究—』くろしお出版刊
- 津田早苗(1994)「談話分析とコミュニケーション」リーベル出版
- 角田三枝(2004)「日本の節・文の接続とモダリティ」くろしお出版
- ディヴィッド・リー(2006)「実例で学ぶ認知言語学」大修館書店
- 時枝誠記(1941)「国語学原論」岩波書店
- 永野賢(1952)「『から』と『ので』とはどう違うか」東京至文堂
- 西阪仰(1999)「会話分析の練習」『会話分析への招待』世界思想社

- 仁田義雄 (1987)「条件づけとその周辺」 『日本語学』
- 新田小雨子(2004)「因果関係を表す接続表現における日中
対照研究—「から・ので」とその中国語相当表現—」
『ことば』25 現代日本語研究会 pp. 67-81
- 新田小雨子(2006)「小説における因果関係を表す接続助詞
『て』と中国語相当表現の対照」 『文体論研究』第
52号(2006年3月刊行)
- 橋内武 (1999)「ディスコース 談話の織りなす世界」 く
ろしお出版
- 服部幹雄(1998)「会話分析におけるデータについて」『紀
要』第四四号 名古屋女子大学 pp. 281-286
- 久野すすむ (1978)「談話の文法」(日本語叢書) 大修館
書店
- ポリー・ザトラウスキー(1993)「日本語の談話の構造分析」
くろしお出版
- 益岡隆志 (2000)「日本語文法の諸相」 くろしお出版
- 松本曜 (2003)「認知意味論」 大修館書店
- 水本光美(2006)「テレビドラマと実社会における女性文末
詞使用のずれにみるジェンダーフィルター」 『日本
語とジェンダー』 ひつじ書房 pp.73-94
- 三尾砂 (1942)「話言葉の文法」 東京帝国教育会出版
- 谷部弘子 (1997)「第6章『のっけちゃうからね』から『申
しておりますので』まで」 『女性のことば・職場編』
現代日本語研究会編 ひつじ書房 pp.139-154
- 谷部弘子 (2002)「第9章『から』と『ので』の使用にみる
職場の男性の言語行動」 『男性のことば・職場編』
現代日本語研究会編 有限会社ひつじ書房 pp.
133-148

An Analysis of the Usage of *kara* and *node* in Naturally Occurring Japanese Conversations

Xixi LI

There are many studies on *kara* and *node*. However, most of the studies are carried out from the syntactic point of view to minutely describe behaviors of *kara* and *node*. In contrast, this study, based on the conversation analysis, aims at describing the usage of *kara* and *node* in discourse. Based on naturally occurring Japanese conversations which contains *kara* and *node*, it analyzes the specific examples one by one to explore what kind of specific features in the conversations *kara* and *node* have as conjunctive words and what kind of effects are achieved through the use of *kara* and *node* in the entire structure of conversations. Besides, it is very hard for learners of Japanese to use *kara* and *node* as naturally as native speakers of Japanese when the learners have a conversation with the native speakers. Therefore, for the learners who want to improve Japanese skills, this study will be a very meaningful research since it explores the natural use of *kara* and *node* in conversations.